

春の夢

米田 規子

かつては二、三匹いた我が家の飼い猫が、今は年寄り猫一匹になってしまった。猫も年を取るといろいろ不都合なことが起きてくる。カリカリとおいしそうな音を立てて食べていたドライフードが喉につっかえるようになり、戸外の気儘な散歩も、若くて強い猫に遭遇すると怪我をして帰ってくる。心配の種でもある猫だが、子供達が育ってしまった今では家族の「かすがい」ともなっている。

猫がそんなに好きではなかった我が家のあるじも、最近はずいぶん猫語がわかるようになった。猫の俳句も少なからず作っているようだ。八年近いフランスでの単身赴任を終えて帰国した当時、猫の存在をなかなか認識できず、ふわふわの尻尾を思いつきり踏んでしまふという大事件が三回くらいあって、家族の輦蹙を買ったものだ。私と言えば、俳句で困った時の猫頼みで大いにお世話になっている。今後も猫との俳句的親密関係は続きそうだ。今、私の傍らで眠っている猫の頭を撫でながら、「ありがとう」と心の中でつぶやき、「これからもよろしくね」と付け加えた。

春大根テーブルに置き空き時間
スキップが上手にタンポポとびとびに
芋の煮ころがし幸せ中くらい
裸木がぎらりと光る風の中
シクラメンだあれもないような午後
若楓子に頼らるはいつまでか
良い知らせトンボ右から左から
今朝の秋動く歩道の横歩く
絵画的フランス料理はなぐもり
夕立のあとすき透りドビュッシー

歯応えのあるものを食べ防災の日
秋の日のピアノの上にダリ画集
フルーツパフェの長いスプーン女正月
桜見に来て白うさぎ黒うさぎ
澄んだ目の魚をおろす遅日かな
はらっぱの木馬に手綱夏めきぬ
熱風三日決心のようなもの
赤や黄の落葉その先考えず
大安寒晴豚足を提げており
夏椿やさしいことばのひとつひとつ

にんげんはきれいな魚天の川
蓮の実が飛んで鎌倉材木座
冬ざるる珈琲店にランプの灯
三月やなにをどこからほぐそうか
メイド・イン・ドイツ酢キャベツ夏蕪
天上天下唯我独尊猫の夏
今日ひとつ良いこと夕日の銀芒
いろいろな野菜のスープ冬隣
こな・さとう・たまご攪拌春なかば
水温むそれぞれ好きなことをして

星座からメロデーこぼれ明易き
二百十日大きな岩のように牛
からまって落葉と風とうちの猫
父の声天から降ってつくしんぼ
伸びて伸びてすたとんと落ちる春の夢
あったかいおにぎりふたつ八重桜
赤い傘消えそれからの若葉寒
橋の上からもっとも涼し亀の首
その先のもやもや餅がふくらんで
真剣に遊んでおりぬ春帽子

三人のちから関係冷奴
よるの雨鰻の尾鰭に化粧塩
茄子の花猫にも日課あるらしく
よこはま秋白いカップと白い皿
中年や長い地下道出て真冬
夕暮の富士のももいろ春少し
青鬼灯あおくぽかんとひとりなり
成長のある日突然夏野かな
面影を辿ってゆけば暑い夏
風の中の二人そここ栗の毬